國華

第千四百十三號

第百十八編
第十二册　明治二十二年十月創刊
平成二十五年七月發行

本文

瀧上寺來迎圖再考……中村興二…九頁
木米筆　嵐山行樂圖……河野元昭…二二
原田直次郎　上野東照宮……鍵岡正謹…二九
金銅聖觀音菩薩立像……田邉三郎助…三三
研究餘錄　國寶傳源頼朝像雜感……有賀祥隆…三六

圖版

九品來迎圖……奈良縣　瀧上寺
下品中生圖（圖版一・色刷）……三頁
上品上生圖（圖版二・色刷）……五
上品中生圖（圖版三・色刷）……七
絹本著色　三幅　各竪一三七・〇糎　横九五・八糎
木米筆　嵐山行樂圖（圖版四・色刷）……二三
紙本墨畫　一幅　竪三〇・一糎　横六〇・〇糎
原田直次郎　上野東照宮（圖版五・色刷）……岡山縣立美術館…二七
油彩　キャンバス　額裝　竪七五・五糎　横五八・五糎
聖觀音菩薩立像（圖版六・色刷）……三一
銅造　鍍金　像高三七・七糎　總高六一・一糎

表紙・紅紋縮緬地束ね熨斗模樣振袖　京都府　友禪史會

乙酉春仲涼花者伯與辛安陶工
命貝川激湍瀹茶于花間雲中圖
爲
花月君
聲未

木米筆　嵐山行樂圖

河野元昭

前號に續いて、識字陶工木米の優品を紹介したい。この「嵐山行樂圖」（圖版四）も早く秋葉啓編『木米名畫譜』（聚樂社　一九三九年）に登載され、昭和四十年（一九六五）、東京國立博物館で開催された「日本の文人畫」に出陳された。そのカタログおよびハードカバー化された『日本の文人畫』（便利堂　一九六六年）に見ることができる。その後、小林忠ほか編『青木木米』（文人畫粹編16）（中央公論社　一九七九年）にも收錄されたが、近年「後赤壁圖扇面」とともに親しく鑑賞する機會を得て、この作品のもつ素晴しさに改めて氣づくこととなつた。畫面左側に、次のような款記（挿圖）がある。

乙酉春仲浪花茶伯與平安陶工向貝川激湍瀹茶于花閒雲中圖爲花月君

聾米《塼埴之工》（朱文方印）《鶴雉之職》（朱文方印）

つまり乙酉の年の三月、大阪の茶匠と平安陶工が貝川の流れに望み、雲のごとき滿開の櫻のもとで茶を淹れ堪能したので、その樣子を花月君のために描いたというのである。乙酉は文政八年（一八二五）、大阪の茶匠と花月君は同一人で、花月庵田中鶴翁である。言うまでもなく平安陶工は木米、貝川についてはよく分からないが、桂川あるいはその支流のことと思われ、現在も京都西院に東西の貝川町がある。そこから嵐山も桂川もそれほど遠くない。言うまでもなく、「向」は「於」のような意味で、「向貝川」ではないであろう。時に木米は五十九歳であつた。心を籠めて鶴翁に描き贈つた本圖が、大正十三年（一九二四）までは確かに田中家に傳わつてきたことを、付屬する讓り狀が傳えている。

鶴翁については、田中青坡『煎茶花月菴』（主婦の友社　一九七三年）に收められる多田蕉風「花月菴の歷史」および脇本十九郎『平安名陶傳』（洛陶會　一九二一年）によつて詳しく知ることができる。それらによれば、俗稱は新右衞門、名は元長、字を儉德と稱した。花月、鶴翁などはその號である。田中家は大阪清水町の造り酒屋、屋敷の中に清水の井戸があり、誇つて菊の井と稱した。看板酒は「戎鯛」と「菊之井」であつたという。

鶴翁は風流の志篤く、香川景樹に和歌を學んで賀壽と號し、黃檗山の聞中禪師に師事して毛孔といつた。さらに賣茶翁高遊外の遺風に心惹かれて煎茶に開眼し、煎茶花月庵流を創始した。天保九年（一八三八）、一條忠香からの招きを受けて京都に上り、茶莚茶式を設けたが、「千代萬（よろず）はなと月とに汲そへよつるの翁のかめをあつめて」の一首をもつて、鶴翁の號を拜受したという。その二年後には、仙洞御所へ參內する榮を賜つた。

ある時、長年渴望していた西湖の水をついに得た鶴翁は、壺を造らせてこれを封藏し、淀川に沈めた。そして「稀に得てうつせし西の湖のみづを長柄に汲めや風流士」と詠んで、永く大阪の人々にその流れを汲んでもらわんとした。その壺を造つたのが木米であつたという。當時、中國憧憬がいかに强かつたかを語つてあまりある。また、茶臼山の邦福寺境內に急須塚を設け、壞れた急須を供養して納めることを勸めたという逸話も、とても心ゆかしく感じられる。

木米の父佐兵衞は京都・大和橋のほとりに茶屋「木屋」を營んでいたが、鶴翁の父はしばしばこの茶屋に遊んだため、木米とも相識であつた。あるとき鶴翁は父とともに木村蒹葭堂を訪問し、たまたま來合わせた木米と出會い、親交を結ぶようになつたという。文政六年（一八二三）のころという說もあるが、これであれば蒹葭堂は無關係だつたことになる。

木米は鶴翁と肝膽相照らす仲となつたらしい。先の『文人畫粹編』には、鶴翁に宛てた木米の書簡が五通も紹介されている。兩者の厚き交流をしのぶために、「看花」の文字が見える一通を、書き下しにしたがつて引用しておこう。崇蘭館所藏の風爐の寫しができあがつたので、明日の茶會で使つていただきたく、速達便で送つたというのが主たる內容である。解說によれば、現在花月庵に共箱の揚名合利寫し涼爐が傳えられ、箱書に「爲田中生　天保初年夏四月　新綠帶日也」とある。文政十三年が十二月に改元されて天保元年となつたので、この手紙は翌天保二年のものと推定されている。「嵐山行樂圖」とは直接關係のない書狀だが、兩者は每年のように花見を樂しんでいた樣子がうかがわれる。

新緑佳節、益清[illegible]
福[illegible]
先生[illegible]清雅之看
花[illegible]清[illegible]甚佳
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
山中蘭館[illegible]風[illegible]
[illegible]得写[illegible]
[illegible]即今[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]新茶捜古腸
茲得一品琅玕[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
四月[illegible]
花月雅伯
木[illegible]拜

新緑佳節に候。愈々御清福御座、大慶の至りに存じ奉り候。先ごろは、計らず清雅の看花、終日御清談承り、其の後謝し奉るべきのところ、延引に相成り、御免下さるべく候。明十六日は喫茶御會日とぞんじ候て、崇蘭館珍玩の風爐漸く寫し得、即ち今日急脚便に相出し候。御落掌下さるべく候。さて此の節は新茶捜古腸、玆に一品琅玕の茶を得、少しばかりに候得共進上候。尚萬事拜眉申候。頓首

四月葵祭日　　木米聾

花月雅伯

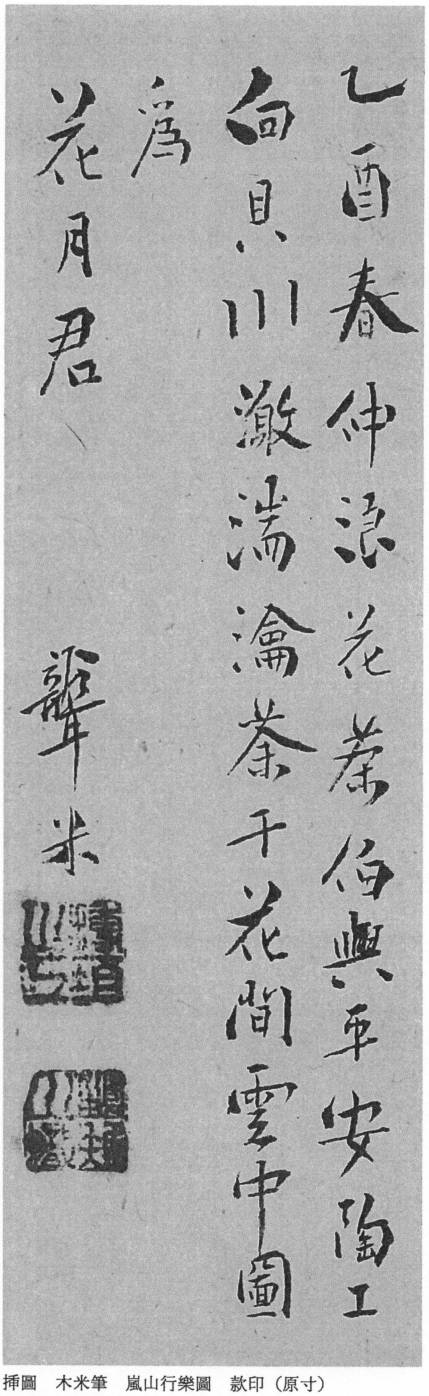
畫面中央、ライトモチーフのように描かれるのは白雲である。その右側、樹木を隔てて望まれる橋は渡月橋なるべく、それを渡る二人はもちろん鶴翁と木米である。白雲の左側、遠くに見える塔は大覺寺の多寶塔であろうか。白描畫と呼びたいような畫風である。白描畫といつても、白描やまと繪ではなく、中國の白描畫ないしは白畫だが、すべて墨線によつて描かれ、墨の面的表現は避けられている。モチーフにおける偶然の一致も手傳つて、「麻布菩薩像」（正倉院藏）がただちに想起される。

そこからこの畫風の源泉として、日中を含めた白描畫を考えたくなる。しかしこのような白描畫が、木米の周圍にあつたかどうか、實證することはむずかしいように思われる。そうなると木米の場合、陶器の繪付けということになるが、これも適當な先例を見つけることは容易でない。繪付けであれば、木米の陶器作品のなかに相似た畫風のものがあつてよさそうなものだが、紹介されている作品の中には、指を差したいものはないようである。

そこで注目されるのは、款記に「圖」とある點である。代表作の「兎道朝暾圖」（東京國立博物館藏）に「甲申仲秋爲阜陽君畫於鑑水樓中」とあるように、木米にあつてはほとんどの作品の款記が「畫」となつている。もちろん畫題は「兎道朝暾圖」となつているが、問題は款記における動詞の使い方である。「嵐山行樂圖」の款記に、識字陶工木米が「圖」を用いたのは、意圖的であつたとみなければなるまい。

言うまでもなく、「圖」も「畫」も物の形狀を寫したものだが、「圖」には繪圖、「畫」には繪畫の意味合いが強く、それは動詞になつても同じである。「嵐山行樂圖」が實體驗に基づく眞景圖に近いもの、あるいは繪畫ほど想像を加えていないものという氣持ちが、木米をして「圖」と言わしめたのではないだろうか。畫風的にこれと通い合うのは、木米の筆になる略圖である。例えば『平安名陶傳』には、一通の「尺牘」がコロタイプ版で紹介されており、そこに煎茶會のしつらいを示す略圖が添えられている。それと「嵐山行樂圖」の閒には、有無通じるものが感じられてならない。

本圖と同じく、白雲が重要なモチーフとなる木米畫に、「薦壽南星圖」（個人藏）や



挿圖　木米筆　嵐山行樂圖　款印（原寸）

「雲出山腰圖」（遠山記念館藏）がある。ところが陶磁器に、雲堂手と呼ばれる一連の茶碗がある。明の民窯で製作された染付磁器で、雲と建物が繪付けされている。雲のフォルムはきわめて抽象的であるし、そもそも雲堂手は抹茶道の方で使われた茶碗であるから、木米に直接靈感を與えたとは斷言できないが、興味深い相似として指摘しておきたい。

縷々述べ來たつたあとで、改めてこの作品のささやきに耳を傾けるならば、「拙」に行き著くのではないだろうか。木米は田能村竹田と胸襟を開いて語り合う仲だつた。今は亡き竹谷長次郎氏は『竹田莊師友畫錄譯解』（笠閒選書　一九七七年）において、その木米の章に關し、「量からいつても師友畫錄中の雄編で、よくこの超凡脫俗の文人の風格、面目を語つている。蓋し竹田と木米と相知ること深きがためである」と述べている。

その竹田に拙の思想があつた。最も端的に現われるのは、『自畫題語』の「春叢群雀卷」で、「畫の拙なる所は、卽ち意の快とする所なり。予の畫固より拙なり。然れども其の拙なる處は、大方名家と雖も、亦或いは能わざる所あるなり。蓋し名家の病は、多く拙ならざる處にあり」とある。

「嵐山行樂圖」を見ていると、自然にこの一節が浮かんでくる。訥々とした筆遣いは、お世辭にも上手いとは言えない。しかしそこにこそ價値があるのであり、我々を魅了する。練磨された畫技は、そこにだけ關心を集めてしまう。例えば、木米も見ていたに違いない中林竹洞や山本梅逸の山水圖と比較して、彼らのテクニックの方を高く評價したとしても、木米がこれを聞いて落膽することは決してなかつたであろう。むしろそれを誇りにしたに違いない。佐々木剛三氏は『木米・竹田』〈日本美術繪畫全集21〉（集英社　一九七七年）において、竹田が言う拙とは巧拙の拙ではなく、技術的な觀點とは異なる繪畫價値の問題であり、拙は意の繪畫的表現であると考えられていたのだと指摘している。これを木米に敷衍して考えることも、もちろん許されてよいであろう。

（こうの　もとあき・國華社）

Plate 4 (Color)　***Pleasures in Arashiyama*** by Mokubei
Hanging scroll, ink on paper
H. 30.1 cm, W. 60.0 cm

KŌNO Motoaki

The inscription on this painting describes how Mokubei painted the work for the Osaka *sencha* master Tanaka Kakuō, depicting the scene in the 3rd month of 1825 (Bunsei 8) of Kakuō and Mokubei setting out to enjoy tea under the cloud-like splendor of cherry blossoms in full bloom, overlooking Kaigawa.

The white clouds appear in the painting as a leitmotif, with the Togetsukyō Bridge seen to the right of the clouds, and the figures of Kakuō and Mokubei shown on the bridge. The tahoto-style pagoda of Daikakuji appears to the left of the clouds.

The character "*ga*," read as the verb *egaku*, literally to paint a picture, frequently appears in Mokubei's inscriptions on his paintings, but in this case Mokubei used the character "*zu*," which implies drawing or sketching rather than painting. While it can be thought that Mokubei chose the character "*zu*" to infer that the work is close to a true-view image based on an actual experience, rather than a painting with its implied addition of imagination, this verb choice might also be related to the painting style he chose for the work, the monochromatic linear depiction method known as *hakubyōga*.

Mokubei's close friend Tanomura Chikuden espoused a philosophy of *setsu*, literally clumsiness or awkwardness. In this aesthetic, painting from the heart is more meaningful that a technically skilled depiction. This painting, with its stuttering brushwork, may have been a reflection of this *setsu* aesthetic.

國華　第一四一三號

平成二十五年七月二十日　發行　定價　金四千六百圓
本體四千三百八十一圓

編輯・發行　國華編輯委員會

寫眞版印刷　便利堂
光村印刷
本文印刷　精興社

發行所　一〇四-〇〇四五
東京都中央區築地五丁目三番三號
築地濱離宮ビル内
電話(五五五〇)五〇一五
FAX(五五四〇)七六五一
國華社

發賣所　一〇四-八〇二一
東京都中央區築地五丁目三番二號
朝日新聞出版

小社より直接購入をご希望の場合は、朝日新聞出版業務部直販擔當まで電話（03-5540-7793）かFAX（03-5541-8025）にてお申し込みください。代金引換の宅配便にてお届けいたします。送料は册數にかかわらず、1回のご注文につき210圓（税込）です。定期購讀のお申し込みは最寄りのASA（朝日新聞販賣所）にどうぞ（送料はかかりません）。

朝日新聞出版のご案内・ご注文
http://publications.asahi.com/

© 朝日新聞社 2013年

國華編輯委員

主幹
小林　忠
關口正之
海老根聰郎
清水眞澄
河野元昭
小川裕充
佐野みどり
島尾　新
佐藤康宏
佐藤道信

名譽顧問
水尾比呂志

顧問
辻　惟雄

【訂正】

・第一四一一號（平成二十五年五月發行）三頁『『ファインバーグ・コレクション』特輯に當つて」において、全國三會場のうちの「島根縣立美術館」は「島根縣立博物館」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。

（國華編輯部）